腕喰ひ

笑福亭松鶴

三遊亭志ん藏繪

へェ一席伺ひます、涼み臺に相應しいお話を演らして頂きます。處は中船場で、若い者を大勢使ふておいでなさるお宅の若旦那、至つて放蕩家で御座ゐますが、遂にお金を掴んでお家を飛出しました。種々苦勞をいたしまして、久々に我が土地へ歸つて參りましたが、親類へも立寄る譯にも行かず、心配を仕て居りましたが、我が家に永らく奉公を致して居りました德兵衞と云ふ者が別家をして、今では立派に商賣をして居りますので、この德兵衞の家へ參りましたが、身には肩の脫けた着物に、嚙りさしの梨みたいに芯の出た帶を締めて、醬油で煮詰た樣な手拭で頰冠りをして、尻切れ草履をはきまして、首筋は垢だらけで門口から、

「どうぞお餘りを頂かして、お手元は御面倒樣で」

「エイ五月蠅い、今帳合を仕かけたらあんな乞食が來よつた、コレ、氣を附けんといかんで、此の頃の乞食は油斷も隙もならん、此の間下駄が知れん樣になつたのもきつとあんな奴が提げて行きよつたに違ひない、コラ彼方へ行け……」

「へ、、、、德兵衞、御機嫌さん」

「そら何を云ふねン、私は乞食に馴染は無いわい、德兵衞やなんて心易そうに、コレ、內へ這入つて來たら不可ん、表へ出んか」

「德兵衞腹も立つやろうが、篤つくりと私の顏を見て勘忍しとくれ」

と頰冠りを取りますと吃驚り致しました。

「貴方は若旦那さんや御座りまへんか」

「フム、德兵衞、作次郎や」

「マアお情ない……、コレおとわ、早う表戸を閉め」

「何んでおまんねん」

「何んでもえゝ、早う表戸を閉め、御主家の若旦那がお歸りになつたんや、表に人が立つたらみつともない」